#### 連載 Dr. 大関の複眼インタビュー --- スポーツメディスン・プロフェッショナルとの対談 10

プロフェッショナル

## [対談] 立石智彦 中阜寺則

同愛記念病院関節鏡・スポーツセンター、東京医科歯科大学スポーツ医学診療センター、 日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ医

国立大学法人筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター准教授

# 広げよう! デフリンピックの輪

インタビュアー: **大関信武** 一般社団法人日本スポーツ医学検定機構代表理事、東京医科歯科大学再生医療研究センター (企画:日本スポーツ医学検定機構)

### 聴覚障がい者のスポーツの 祭典・デフリンピック

大関:今回は今年7月18日~30日トルコ・サムスンにて開催された「第23回夏季デフリンピック競技大会」にメディカルとして帯同された立石先生、そして第21回(2009年)・第22回(2013年)の夏季デフリンピック大会にて日本選手団本部トレーナーとして帯同のご経験をもつ中島先生にお話をうかがいます。よろしくお願いします。

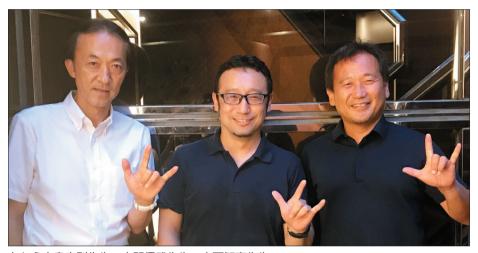
この夏、聴覚障がい者のオリンピックであるデフリンピックがトルコで開催されましたが、日本選手団も活躍しましたね。

立石:はい、今回、日本選手団のメダル 獲得数は金メダルが6個、銀メダル9個、 銅メダル12個でした。とくにメダル獲得 が多かったのは陸上競技、水泳でしたが、 女子バレーボールは全試合ストレート勝ち で優勝して、広く報道されました。

大関:女子バレーボールには16歳の若い選手が2名メンバーに入っていましたね。 今回の女子バレーボールの強さの要因は何でしょうか。

立石: もともと女子バレーは強かったのですが、今大会は元日本代表で北京オリンピックに出場経験をもつ狩野美雪さんが監督に就任しさらに強化がなされた結果だと思います。

大関: なるほど。本当に素晴らしい活躍で



左から中島幸則先生、大関信武先生、立石智彦先生

#### 中島幸則 (なかじま・ゆきのり)

1962 年生まれ。東京都出身。千葉県立柏南高等学校卒。順天堂大学体育学部卒。8 年間スポーツクラブにて運動指導。東京慈恵会医科大学スポーツ医学研究室にて13 年間アスリートのアスリハ指導。2000 年 U-17 サッカー日本代表チームに帯同。2009 年デフリンピック日本選手団本部トレーナーとして帯同・同年、聴覚障がい者に関する研究で学位(医学博士)を取得。日本体育協会公認アスレティックトレーナー(JASA-AT)、日本トレーニング指導者協会認定 上級トレーニング指導者(JATI-AATI)、日本障がい者スポーツ協会障がい者スポーツトレーナー

した。それでは、初めて聞いた方もいると 思いますので、デフリンピックとはそもそ もどういう大会なのか、中島先生におうか がいします。

中島:デフリンピックとは、4年に1度開催される聴覚障がい者のオリンピックです。パラリンピック、スペシャルオリンピックと合わせて3つの障がい者の大会がありますが、パラリンピックに聴覚障がい者は

#### 立石智彦(たていし・ともひこ)

1967年生まれ。徳島県出身。私立灘高等学校卒。1993年東京医科歯科大学医学部卒。日本体育協会公認スポーツドクター、日本障がい者スポーツ協会医学委員、全日本柔道連盟医科学特別委員。徳島ヴォルティス、バルドラール消安、スフィーダ世田谷、アサヒビールシルバースター、ヤクルトレビンス、北海道日本ハムファイターズのチームドクターを務める。

参加できません。ですから聴覚障がい者が 目指すのはデフリンピックかオリンピック のどちらかになります。

大関:デフリンピックかオリンピックということは聴覚障がいがあってもオリンピックに出場できるということですね。

中島:そうです。2000年のシドニーオリンピックで、競泳 200m平泳ぎ種目に出場したテレンス・パーキン選手(南アフリ

Sportsmedicine 2017 NO.195 25



第 23 回夏季デフリンピック競技大会開会式の様子。国際手話とトルコ語手話の通訳が常に画面に 出ている

カ共和国代表)が、デフ・アスリートでしたが銀メダルを獲得しました。しかし、日本人のデフ・アスリートでオリンピックに出場した選手はいません。

大関: 今回立石先生が帯同されたのは夏季 大会でしたが、冬季大会もありますか。

中島:あります。立石先生も2年前にロシアで開催された冬季大会に帯同されました。基本的にはオリンピックと同様です。

#### デフリンピックとパラリンピック

大関:先ほど、デフ・アスリートはパラリンピックには出場できないとうかがいましたが、障がい者スポーツの祭典であるパラリンピックに聴覚障がいが含まれていないのはどうしてでしょうか。

中島:実際に国際パラリンピック委員会が発足した1989年当時は、国際ろう者スポーツ委員会も加盟していましたが、いろいろな考え方の違いからやはり一緒に行うのはむずかしいという判断のもと1995年に脱退した経緯があります。

もともとパラリンピックはリハビリテーションから始まったものですが、デフリンピックはリハビリテーションではなく楽しむため、さらに記録重視から始まったもの

です。ですからスタートの音や審判の声に よる合図を視覚的に行う以外は、オリン ピックと同じルールで運営されています。

大関:考え方としてはオリンピックに近い ということですか。

中島: そうですね。あとは聴覚障がいです から手話で大会を運営しています。

大関:デフリンピックに参加できる条件は どのようなものでしょうか。

中島:補聴器等(補聴器や人工内耳の体外パーツ等)を外した裸耳状態で、平均聴力が55 デシベルを超えている聴覚障がい者で各国のろう者スポーツ協会に登録されている選手が参加できます。競技中も補聴器等の使用は認められていません。

大関: 聴覚検査も行われるのでしょうか。

中島: 聴力レベルの詐称の有無を検査する ために、新規登録選手は大会中に再検査さ れる場合があります。

**大関**: 抜き打ち検査は大会中に行われるのですか。

立石:はい。抜き打ちに呼ばれて検査が行われます。今回は自転車や水泳といった持久系の競技において細かく検査が行われていました。聴力検査を受けた選手がロシアで10名弱、今回は2割くらいいました。

大関:薬物ドーピングの抜き打ち検 査はデフリンピックでも同様に行わ れるのですか?

立石:基本的に同じです。ただ予算の関係があるかと思いますが、ロシアで開催された冬季デフリンピックは1位の選手だけ全種目で行われていました。今回はシャペロンやDCO(ドーピングコントロールオフィサー)の数が足りないのかもしれませんが、全種目は行われていませんでした。大会によって異なる状況で少しギャップがありました。

#### デフリンピックの種目や特徴

大関:デフリンピックの種目についてですが、今大会は何種目あったのですか?

中島:全部で27種目行われました。何ができない、どの種目ができないということはありませんので、基本的にはオリンピックと同じ種目があります。

**立石**: ただボウリングとかオリエンテーリングといった種目もあります。

大関: たとえば視覚障がい者にはゴールボールといった種目がありますが、聴覚障がい者に特化した種目はないのでしょうか。

立石: そういう種目はありませんね。

大関:種目は健常者と同じで、合図やルールが違うのでしょうか。

立石:大会ごとに運用が違ったりしますが、音が聞こえないのでスタートの合図が視覚でわかるように、柔道や空手の種目であれば、まわりにランプが点くようになっています。サッカーであればオフサイドは後ろを向いているとわからないので、主審、副審のほか、ゴーム裏に2名合図を出す人がいます。音の代用で主審が旗を持って見えるようにしています。

大関:陸上競技のスタートも旗ですか。

中島:陸上ではランプですね。

大関:競技によっていろいろとあるということですね。たとえば試合後のメダルの



空手の競技会場。コンタクト競技で周囲にライトの枠組みがあり試合中にポイントを色で示している

授賞式の国歌斉唱はどうされるのでしょう か。

中島:いつもは、国旗が掲揚されるときに は、静かに上がって国旗を見つめる姿が普 通でしたが、今回、女子バレーボール日本 チームは金メダルを取り、国旗が掲揚され るときに、手話を使って歌っていました。 立石:私も手話の国家斉唱は初めて見まし た。連盟の方たちも国歌の手話をつくらな いといけないと話していたので、今回のも のは正式なものではなく自分たちで考えて 練習したものを披露したと思います。サッ カーの試合前の国歌斉唱のときも一応やっ ていたましたが、今回のバレー選手が行っ た手話とは違っていました。手話通訳者さ んか誰かが前でリズムをとって指揮して、 皆もそれに合わせてやっていたのだと思い ます。

#### デフリンピックのメディカル体制

大関:メディカル体制についておうかがい しますが、日本選手団は108名だったよ うですが、メディカルスタッフは何名が帯 同したのですか?

立石:前回大会は内科1名、外科1名という体制でやらせていただきましたが、今

大会は男性ドクター1名と女性ドクター1名(途中交代あり)が帯同しました。そのほうが女性特有の問題について選手も相談しやすいだろうと考えてのことです。トレーナーは男性1名、女性1名の帯同となりました。それから毎回、国立障がい者リハビリテーションセンター病院の看護師さんが JPC (日本パラリンピック委員会)の紹介で1名帯同しています。

**大関**:メディカルスタッフの方々は選手た ちとどのようにコミュニケーションをとら れるのですか。

立石:基本的に診察時には手話通訳者さんについていただいています。先にアンケートをとって、どのようにしてほしいか聞いておきます。たとえば手話を使うときにはマスクを外してほしいとかですね。なかには、手話通訳者さんを入れてほしくないという方もいらっしゃいます。身体の情報は個人情報でもあるので、慎重に対応しています。

大関:診察や治療を行う場所は、選手村に まとまってあったのですか。

立石:はい、ありました。しかしロシアやドイツは選手村外に自分たちでホテルを借り上げてやっていました。

大関:以前は離れたところにあって 診察が大変だったという話も聞きま した。

立石: そういう大会もありましたが、今回は選手村が一つにまとまっていたので異なる競技同士の交流があったのでよかったと思います。

大関: 今大会の帯同で病気やケガな どの発生や治療はどういったものが 多かったですか。

立石:風邪や下痢が多少ありましたが、どこの大会でもあるレベルでした。ただ、自転車の選手が転倒して病院に運ばれたことがあり、私も会場にいたので、救急車に一緒に乗って会場近隣の病院で治療していただきました。現地の医師も事前に「使ってはいけない薬」の資料一式を渡さ

れていたようで、ドーピングに関する知識もしっかりしていました。

大関: ケガもあるし、内科的なことも多い、 と。

立石: そうです。やはり骨折などもあるので、外科一人、内科一人の配置がいいのか、 男性医師一人、女性医師一人の配置がいいのか、 悩ましいところです。

**大関**:薬は先生がまとめて持っていったのですか。

立石:そうです。実は今大会の日本選手団主将を務めた早瀬久美さん(昭和大学病院)がスポーツファーマシストの資格をお持ちで医科学委員会にも所属しておりましたので、事前に薬の整理をしていただいたり、ダブルチェック、トリプルチェックといったところでも、お忙しいなか来ていただいてサポートしていただきました。早瀬さんご自身はマウンテンバイクの女子クロスカントリー・オリンピック(XCO)に出場され銅メダルを獲得しています。

大関:メディカル体制は整ってきていると 考えてよいでしょうか。

立石:ですが、まだまだ考えていかなければいけないことはあります。連盟にチームドクターやトレーナーがいて、それを統括

Sportsmedicine 2017 NO.195 27



デフリンピック結団式。左から山根昭治団長、薬師寺みちよ参議院 議員、鈴木大地スポーツ庁長官、駐トルコ中村耕一郎臨時代理大使。 後列にはメディカルスタッフ

して、デフリンピックを本部中心に動いていくといった体制が確立できればと思っています。その方向性に向けてずっと調整してきて、やっと今年、医学委員会が立ち上がりました。今からしっかりと運営していかなければいけないと思っています。

大関: デフリンピックは4年に1度の大会ですが、それ以外でもデフ・アスリートの大会は行われています。聴覚障がい者のスポーツにおける課題はありますか。

立石:私が感じているのは、4年前の大会 はマスコミでもあまり取り上げられていま せんでしたが、今大会は多くのマスコミ関 係者の方に取材に来ていただきました。さ らにスポーツ庁の鈴木大地長官がトルコま で視察に来ていただいたことでもデフリン ピックが紹介されました。選手たちも頑 張って、過去最多となるメダル27個を獲 得したので注目されたのだと思います。環 境をよりよく変えるには、連盟も一眼と なって選手をサポートし、選手も成績を出 して、マスコミに取り上げてもらう、とい うようにいい循環が生まれていけばと思い ます。そして、日本でデフリンピックを開 催するのが将来的な夢だと思いますが、実 は、まだ1年半後の冬季大会の開催国も決 まっておらず、次回の夏季大会の開催国も 決定していません。各国の経済的事情も あると思いますが、今回、総合メダルラ ンキングでいうと、ロシアが金メダル85 個、銀メダル53個、銅メダル61個の計 199個獲得し断トツ1位で、次にウクライ

ナ99個(金21個、 銀20個、銅36個)、 3位韓国52個(金 18個、銀20個、銅 14個)、4位トルコ 46個(金17個、銀 7個、銅22個)、5 位に35個を獲得し た中国とイランで した。日本は27個 (金6個、銀9個、 銅12個)で7位で

す。今回韓国が3位になったこともあって、 済州島で開催してはどうかという話もあっ たのですが、決定には至っていません。

**大関**:開催に対して金銭的な問題があるのでしょうか。

立石: そもそも1年半後の冬季大会の開催 国も決定していないわけですが、日本での 開催の可能性としては、まだ手話通訳者が 足りないことから、デフリンピックの開催 は難しいと思います。私たちメディカルも まだまだこれからですし、いろいろなとこ ろでこれから積み上げていかないといけな いと思っています。

大関:手話通訳者が足りないということですが、手話は国際的に共通ではないですよね。

立石: 言語文化と同じで各国で違っていますね。

中島: 一応、国際手話というものがあって、 大会運営は国際手話という考え方です。

大関:選手も国際手話を覚える必要があり ますか。

中島:国際手話を覚えている選手もなかに はいますが、それぞれの国の手話である程 度のコミュニケーションがとれる場合も多 いようです。

大関: なるほど、それも面白いですね。また、ここに立石先生と一緒に女性ドクターとして帯同された松村惠津子先生(東京医科歯科大学附属病院 運動器外科)が来られていますので、是非今大会を振り返って一言いただけますか。

松村:今大会は本部として帯同したのですべての競技の選手を診ることになりました。選手とのコミュニケーションは手話通訳者さんを介して行いましたが、選手が私に伝えたいことをきちんと受け取れているのか、逆に私が伝えたいことが正しく選手に伝えられているのかなど、選手の望んでいることに対して十分な対応ができているのかと一つひとつ考えました。また、デフリンピックを盛り上げ、環境をよくしたいと考える本部スタッフや選手の頑張りを身近に見ることができ、とても勉強になりました。

大関:今後もメディカルとして関わりながら一緒にデフ・スポーツを盛り上げていけるといいですね。松村先生ありがとうございました。それでは、最後に中島先生から一言お願いします。

中島:はい、聴覚障がい者というものを理 解したうえでデフ・スポーツに関わってほ しいというのが私の願いです。聞こえてい るようで実は聞こえていない、聴覚障がい 者の特性というものをわかったうえで、ト レーナーやドクター、指導者が関わってい かないと選手のためにはならないと思って います。医科学委員会でそのあたりの啓発 をしていきたいと思っています。現在、大 関先生たちがスポーツ医学検定を行ってい ますが、国際大会に帯同する手話通訳者の 方たちにも是非受けてもらって最低限のス ポーツ医学のレベルをもったうえで関わっ ていただくのが一番いいと思っています。 大関:中島先生、ありがとうございました。 今日はデフリンピックおよびデフ・スポー ツについて立石先生、中島先生、さらに松 村先生にもお話をうかがいました。長い時 間ありがとうございました。

おおぜき・のぶたけ 1976 年生まれ。兵庫県川西市出身。2002 年3月 滋賀医科大学医学部医学科卒業。2014 年3月 横浜市立大学大学院修了(医学博士)、2015 年3月 より東京医科歯科大学再生医療研究センタープロジェクト助教。現在、東京医科歯科大学スポーツ医学療センター、八王子スポーツ整形外科非常勤医師としても勤務。整形外科専門医、日本体育協会公認スポーツドクター。2015 年12 月 「一般社団法人日本スポーツ医学検定機構」を設立し、代表理事を務める。

28 Sportsmedicine 2017 NO.195